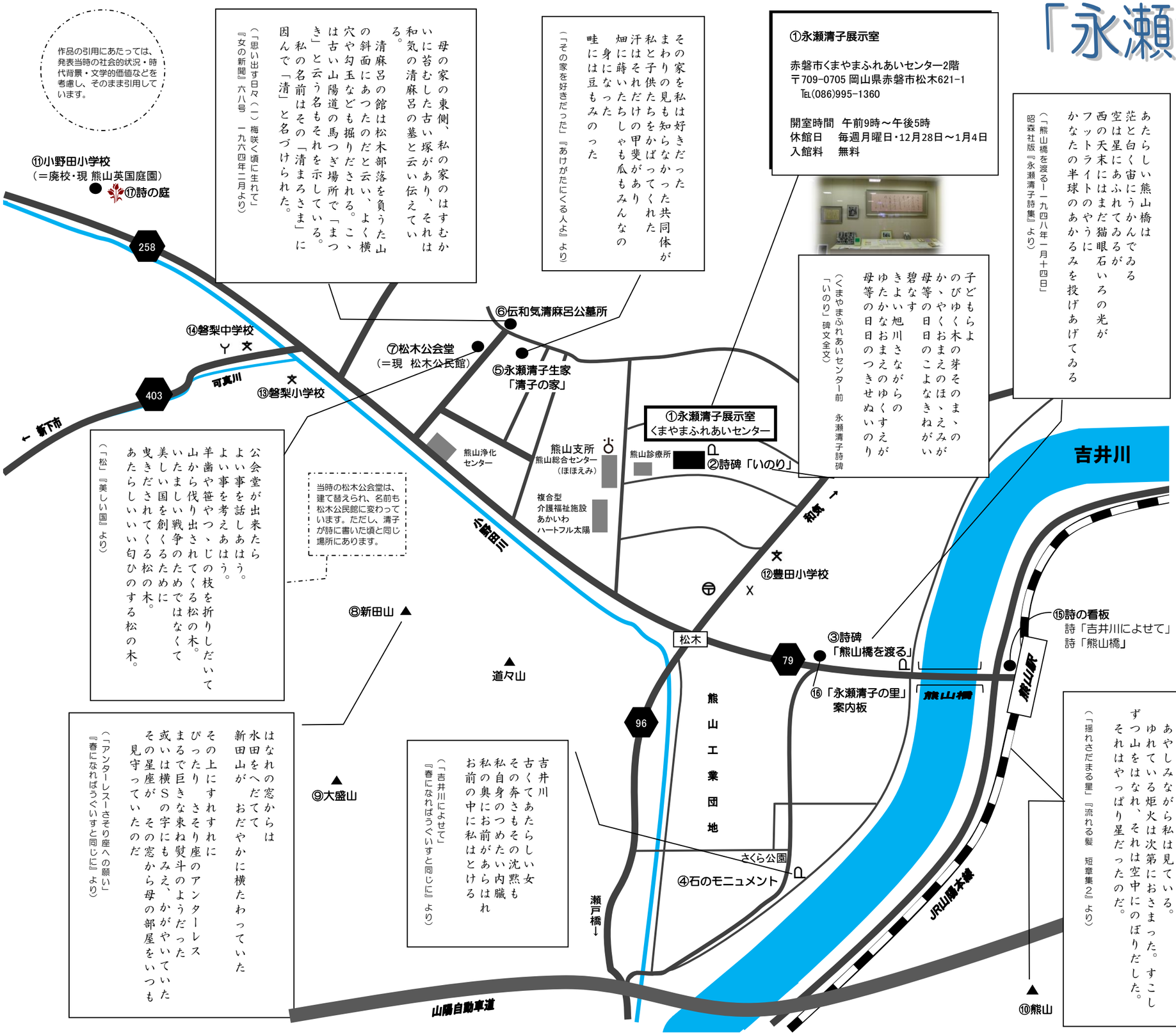
「永瀬清子の里」地図

作品の引用にあたっては、発表当時の社会的状況・時代背景・文学的価値などを考慮し、そのまま引用しています。



母の家の東側、私の家のはすむかいに苔むした古い塚があり、それは和気の清麻呂の墓と云い伝えている。
清麻呂の館は松木部落を負うた山の斜面にあつたのだと云い、よく横穴や勾玉なども掘りだされる。こゝは古い山陽道の馬つぎ場所で「まつき」と云う名もそれを示している。
私の名前はその「清まろさま」に因んで「清」と名づけられた。

（「思い出す日々（一）梅咲く頃に生れて」『女の新聞』六八号 一九六四年二月より）

その家を私は好きだった
まわりの見も知らなかった共同体が
私と子供たちをかばってくれた
汗はそれだけの甲斐があり
畑に蒔いたたしゃも瓜もみんなの
身になった
畦には豆もみのった

（「その家を好きだった」『あけがたにくる人よ』より）

①永瀬清子展示室

赤磐市くまやまふれあいセンター2階
〒709-0705 岡山県赤磐市松木621-1
TEL(086)995-1360

開室時間　午前9時～午後5時
休館日　毎週月曜日・12月28日～1月4日
入館料　無料

子どもらよ
のびゆく木の芽そのまゝの
かゝやくおまえのほゝえみが
母等の日日のこよなきねがい
碧なす
きよい旭川さながらの
ゆたかなおまえのゆくすえが
母等の日日のつきせぬいのり

（くまやまふれあいセンター前　永瀬清子詩碑「いのり」碑文全文）

あたらしい熊山橋は
茫と白く宙にうかんでゐる
空は星にあふれてゐるが
西の天末にはまだ猫眼石いろの光が
フットライトのやうに
かなたの半球のあかるみを投げあげてゐる

（「熊山橋を渡る」一九四八年一月十四日　昭森社版『永瀬清子詩集』より）

公会堂が出来たら
よい事を話しあはう。
よい事を考えあはう。
羊歯や笹やつゝじの枝を折りしだいて
山から伐り出されてくる松の木。
いたましい戦争のためではなくて
美しい国を創くるために
曳きだされてくる松の木。
あたらしいいい匂ひのする松の木。

（「松」『美しい国』より）

当時の松木公会堂は、建て替えられ、名前も松木公民館に変わっています。ただし、清子が詩に書いた頃と同じ場所にあります。

はなれの窓からは
水田をへだてて
新田山が　おだやかに横たわっていた
その上にすれすれに
ぴったり　さそり座のアンターレス
まるで巨きな束ね熨斗のようだった
或いは横Sの字にもみえ、かがやいていた
その星座が　その窓から母の部屋をいつも
見守っていたのだ

（「アンターレス－さそり座への願い」『春になればうぐいすと同じに』より）

吉井川
古くてあたらしい女
その奔さもその沈黙も
私自身のつめたい内臓
私の奥にお前があらはれ
お前の中に私はとける

（「吉井川によせて」『春になればうぐいすと同じに』より）

すっかり仕事がすむ頃、空には星が出はじめ、私は闇の中に一人たたずんだ。
水の音がまだ聞こえるかどうか私はじっと耳を澄ませていた。
すると私の向いあっている東の熊山の頂上に、誰かが炬火を振っている。星にしてはあまりに大きな光。それにぽっと月の出のようにまわりが赤らんでみえる。そして何かの合図のように大きくゆれている。でも誰が何のために今頃炬火を振るのだろうか。
あやしみながら私は見ている。
ゆれている炬火は次第におさまった。すこしずつ山をはなれ、それは空中にのぼりだした。
それはやっぱり星だったのだ。

（「揺れさだまる里」『流れる髪　短章集2』より）

①永瀬清子展示室

【詩碑】
②詩碑「いのり」（赤磐市くまやまふれあいセンター前）
③詩碑「熊山橋を渡る」（制作 白石齊　書 額田桂崖）
④石のモニュメント（制作 白石齊　書 額田桂崖）

【ゆかりの場所】
⑤永瀬清子生家「清子の家」（国登録文化財）
⑥伝和気清麻呂公墓所（市指定文化財）
⑦松木公会堂（＝現 松木公民館）

【作品に登場する山】
⑧新田山（しんでんやま）
⑨大盛山（おおもりやま・おおもりあげ）
⑩熊山

【校歌を作詞した熊山地域の学校】
⑪小野田小学校
（＝廃校・現 熊山英国庭園　※校歌碑あり）

⑫赤磐市立豊田小学校
⑬赤磐市立磐梨小学校
⑭赤磐市立磐梨中学校
} 見学はできません

【その他】
⑮詩の看板（JR熊山駅前ロータリー）
⑯「永瀬清子の里」案内板（熊山工業団地入口）
⑰詩の庭（熊山英国庭園内 体験棟横）
（清子の作品に登場する植物を植えています）

【凡例】
🕮 … 記念碑
✕ … 小中学校
■ … 建物
▲ … 山
● … ゆかりの場所等
♂ … 支所
Y … 消防署
X … 駐在所
〒 … 郵便局